（資料５）
川田家住宅主屋（かわたけじゅうたくしゅおく）

員　数：１棟
所在地：丹羽郡扶桑町
所有者：個人

【概要】
「川田家住宅主屋」
構造、形式及び大きさ：木造２階建、瓦葺、建築面積 196 ㎡
建設年代：明治 24 年（1891）頃／大正６年（1917）移築
（登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの）

川田家住宅は、丹羽郡扶桑町のほぼ中央に位置する。丹羽郡扶桑町は愛知県北部の濃尾平野に位置し、北に木曽川が流れる。この地は江戸時代から副業として養蚕が盛んで、明治 39 年(1906)に扶桑村が誕生した当時は、村の全耕地の大部分が桑園となった。「桑によって扶養される町」が町名の由来であり、昭和５年(1930)に繭の生産高は愛知県で第一位であった。

川田家の初代治平は、畑作農業を営んでいたが、二代目源助の時に「川田商店」という屋号で種屋を起こし、「種屋源左エ門」の名前で知られ、この地方の特産物である大根などの種を扱う商売を手がけた。三代目伊兵衛が、この種屋を大きくし貸金や保険などの金融業も営み財をなした。

四代目辰三郎は、三井生命保険会社の代理店を営んだ。三代目伊兵衛が大正６年(1917)五代目稔の誕生に合わせて、羽黒村（現犬山市羽黒）の町家を購入し、大工棟梁川田治兵衛によって現在地に移築された。その後昭和 30 年(1955)頃まで２階で養蚕も行った。

川田家主屋は、木造２階建入母屋造[1]桟瓦葺の和小屋組に窓に縦格子を入れた町屋を移築時に表裏の空間構成を逆転して農家として再生した。平面構成や軸組、意匠は町家由来の特徴を持つ一方、２階は温度湿度管理が可能な養蚕室として使用され、天井の一部が開閉して窓から入った空気を越屋根[2]から排熱ができる構造だったことや、床に荷揚げ用の開口があるなど、養蚕に関する装置を持った農家の特徴が見られる。

昭和 61 年(1986)の瓦の葺替に伴い、養蚕のための越屋根を撤去し、現在は高齢者のふれあいサロンとして活用されている。

川田家住宅主屋　北面（１・２階の縦格子）
（扶桑町教育委員会　提供）

川田家住宅主屋は、町家風の意匠の建物として農家に転用された好例である。

入母屋造[1]：屋根の形式の一つ。中国及び日本建築における代表的な屋根形式。寄棟造の上に切妻造を載せた形で、切妻造の四方に庇が付いてできたもの。
越屋根[2]：採光・換気・煙出しなどのため、屋根の上に、棟をまたいで一段高く設けた小屋根。